研究資料

高校卒業後に実業団入りした女子バスケットボール選手のキャリア選択過程：複線径路等至性アプローチによる検討

北村　麻衣[1)]　　木内　敦詞[2)]

KITAMURA Mai[1] and KIUCHI Atsushi[2]: The career decision-making processes of female basketball players who joined a commercial league after graduating from high school: An investigation using the Trajectory Equifinality Approach. Japan J. Phys. Educ. Hlth. Sport Sci.

Abstract: The purpose of this study was to clarify the career decision-making processes of former athletes using the Trajectory Equifinality Approach (TEA). The participants were 4 former female basketball players who joined the Women's Japan Basketball League (WJBL) soon after graduating from high school. The TEA was used as a framework for analysis of semi-structured interviews designed to reflect the diversity and commonality of career choices. The following 3 points were identified: (1) Family and high school coaches had a significant influence on career choice at the time of high school graduation and led to joining the WJBL, affecting both Social Guidance (SG) and Social Direction (SD). (2) With regard to career choice leading to retirement, the SG and SD influencing career choice were more diversified than at high school graduation. (3) Former players who had reached a new Equifinality Point (EFP) where they continued to be involved in basketball as a second career were significantly influenced by their coaches during their playing days. In summary, this study has clarified the diversity and commonality of the career selection process that former WJBL players actually followed. These findings are expected to contribute to broadening the range of career choices and second career choices for athletes, leading to career development.

Key words : qualitative study, Trajectory Equifinality Model, Social Cognitive Career Theory
キーワード：質的研究，複線径路等至性モデル，社会・認知的進路理論

Ⅰ　緒　言

1.　日本の女子バスケットボール界の現状

日本の女子バスケットボールの頂点に位置づけられるバスケットボール女子日本リーグ（Women's Japan Basketball League：以下「WJBL」と略す）では，現役中に起業する選手や結婚・出産を経て競技復帰する選手やコーチと両立する選手といった，デュアルキャリアを歩む選手が現れ始めている（日刊スポーツ，2020；朝日新聞デジタル，2021）．日本スポーツ振興センター（2014）は，デュアルキャリアを「人生や生涯を先ず一本の『キャリア』と捉え，そこに『アスリートキャリア』というもう一本の軸を追加した二重性がある状態を『デュアルキャリア』と解釈」し，定義づけている．同様に，WJBL を引退した後のセカンドキャリアについても，大学や大学院に進学したり，バスケットボールのコーチとして活動したり，所属企業に残って働いたりというように（小畑，2014），デュアルキャリア・セカンドキャリアとしてそれぞれが辿る人生径路が多様化してき

1）学習院大学スポーツ・健康科学センター
　〒171-8588　東京都豊島区目白1-5-1
2）筑波大学体育系
　〒305-8574　茨城県つくば市天王台1-1-1
連絡先　北村麻衣

1. *Centre for Sports & Health Sciences, Gakushuin University*
1-5-1, Mejiro, Toshima-ku, Tokyo 171-8588
2. *Faculty of Health and Sport Sciences, University of Tsukuba*
1-1-1 Tennodai, Tsukuba, Ibaraki 305-8574
Corresponding author　mai.kitamura@gakushuin.ac.jp

ていると考えられる．

日本の男子プロバスケットボールリーグ（Japan Professional Basketball League：以下「B リーグ」と略す）においては，大学に在学しながらシーズンオフの期間に特別指定選手[注1)]として B リーグを経験する選手はいるものの，高校卒業後にそのまま B リーグに入団する選手は珍しい．しかし WJBL の場合は，数年前までは高校卒業後に WJBL 入りする選手の方が圧倒的に多かった．2019―20 シーズンに所属選手 158 名のうち大学に進学した選手が 50% を超え，直近の 2020―21 シーズンでは 177 名中 98 名（55.4%）となっている．このように，少しずつ大学に進学する選手も増えてきたものの，大学卒業後の 22 歳からしかプレー資格を得られないアメリカ女子の最高峰リーグである WNBA や（WNBA，online），大学スポーツを経て入団した選手が 90% を超える（B リーグ，online より筆者調査）日本男子の B リーグと比較すると，高校卒業後に大学進学か実業団入りかの進路選択を迫られるという点は，日本の女子バスケットボール固有の特徴と言える．

2. 問題の所在

先述の現状を踏まえると，日本の女子バスケットボールトップ選手においては，2 つのキャリアトランジション[注2)]が起こると考えられる．1 つ目は WJBL 入団時，2 つ目は WJBL 引退時である．1 つ目の WJBL 入団時のキャリアトランジションに関して，現状として WJBL 選手の半数以上が，高校卒業後大学に進学するようになったと述べたものの，日本代表に名を連ねる女子バスケットボール選手の中で大学に進学した選手は 2016 年のリオデジャネイロ五輪で 3 名，2021 年の東京五輪で 2 名となっている．この事実は，日本代表を育成年代から目指す選手は，高校卒業と同時に大学ではなく WJBL に進む傾向が顕著であることを示している．しかし，小畑（2014）はこの進路選択に対し，WJBL 引退者を対象にキャリア形成の意識やバスケットボール界に必要なセカンドキャリアに必要なことを質問したインタビュー調査から，「高卒の選手は人生設計がない中で直接 WJBL に入る傾向がある」と述べ，いざ引退を迎えた際にセカンドキャリアを確立するために具体的にどう行動すべきかわからないという問題を指摘している．また，三倉・小笠原（2021）も WJBL 引退者がコーチとしてのセカンドキャリアを志望する際，「高校卒業後にすぐに実業団に進んだことで教員免許取得が叶わず，コーチとなることを諦めている現状も明らかとなった」と述べていることからも，高校卒業後すぐに WJBL に入団したことによって，競技引退後のキャリアトランジションに問題が生じるケースも見受けられる．女性は，男性に比べて競技の引退時期が早いとされるため（笹川スポーツ財団，2014），高校卒業時に WJBL のチームから勧誘があった場合は，その勧誘を断って大学進学を選んでしまうと，大学卒業時に同様のチャンスをもらえるかわからないなどと言った理由で WJBL 入団を選択する選手も多いと考えられる．しかしながら，高校卒業時の進路選択について実際は選手がどのような経緯で進路選択をし，キャリアについてどのように思考し，どのような人生径路を辿ったのか，具体的な報告は見当たらない．

2 つ目の WJBL 引退時のキャリアトランジションについては古殿・畑岸（2018）の報告がある．そこでは，WJBL 引退者のアンケート調査から，引退者が「競技中に学んだスキルを引退後も生かすことができると考えている」としながらも，引退前にスポンサー企業等が実施する面談や就職支援といったキャリアサービスを利用していない現状があることが指摘されている．小畑（2014）も，WJBL 引退選手へのインタビュー調査から，「選手個人の引退後のキャリアに備える姿勢や考え方が欠如している」と述べた上で，OG がキャリアトランジション時にどのような考え方をしてきたか，情報収集できる環境を整えることの必要性を述べている．

このような問題点を解決するような，個人の辿った径路を明らかにし，選手の情報収集の手段となり得る先行研究として，小林ほか（2017）は陸上競技の日本代表経験のある 4 名の選手を対象に，複線径路等至性モデル（Trajectory Equifinality

Model：以下「TEM」と略す）を用いたライフヒストリー研究を実施している．TEM は非可逆的な時間の流れで生きる人の行動や選択の径路を分析するモデルであるが，この研究では TEM の特徴を活かし，個人が辿った径路やそれぞれの共通点を見出して報告している．その他にもオリンピアンの抱える心理的課題やそのサポートの在り方について検討した研究（林・土屋，2012）や，野球選手でイップスを経験した人の克服過程を詳細に示した報告（向，2016）等，TEM を用いることである事象に焦点化し，そこに至るまでの径路を具体的に示した研究が行われている．

これらを参考に，デュアルキャリアやセカンドキャリアが多様化する日本の女子バスケットボール界の現状を踏まえると，自分たちと同じ世界でプレイし引退したアスリートが，引退に至るまでにどのような思考をし，キャリア選択したのか，その事例を具体的かつ詳細に提示できる TEM を用いた研究が望まれる．

3. 研究の目的と意義

以上より本研究では，女子バスケットボール元日本トップ選手の高校卒業後の進路選択と引退後のセカンドキャリア選択に至るまでの径路およびその背景について，複線径路等至性アプローチ（Trajectory Equifinality Approach：以下「TEA」と略す）を用いて明らかにすることを目的とした．本研究では，女子バスケットボールという特定の競技に着目している．その理由は，今まさに進路選択しようとする高校生バスケットボール選手や WJBL の引退を検討している選手に対して，生きた資料を提供できると考えたからである．

II 研究方法

1. 対象者の選定

表 1 に本研究対象者のプロフィールを示す．本研究では，研究対象のサンプリング構造である「歴史的構造化ご招待（Historically Structured Inviting：以下「HSI」と略す）」を用いて研究対象者を選定した．HSI とは，設定された等至点を経験した対象者を選定する概念であり，「あくまでも研究者の最初の関心に基づき対象となる人を招き入れてその経験をうかがうもの」（安田，2015）としてあえて「ご招待」という言葉が使用されている．HSI に基づき，①高校卒業後すぐに WJBL に入団し，②現役を引退し，セカンドキャリアに移行した経験をもつ元 WJBL 選手を選定する必要があった．また，径路の多様性を示すことを意図して，高校や WJBL で所属したチームに偏りが生じないよう考慮しながら，調査者や関係者の対人ルート，縁故関係などから標本を選ぶ機縁法により 4 名を選定した．なお TEM を用いた研究においては，対象者が 1 名の場合は個人の径路の深みを探ることができ，4 ± 1 名の場合には経験の多様性を描くことができ，9 ± 2 名の場合には径路の類型を把握することができるとされている（荒川ほか，2012）．

2. 分析の枠組み

本研究では，女子バスケットボール元日本トップ選手の高校卒業後の進路選択と引退後のセカン

表 1 研究対象者のプロフィール

研究対象者	年齢	競技歴	主要成績	引退後
A	30	16 年	各世代別代表，日本代表，リオ五輪出場 アジアカップ 3 連覇，WJBL10 連覇	子育て，バスケットボールクリニック
B	33	17 年	全中出場，ウィンターカップ優勝 ジュニア日本代表	会社員生活，ユースチームコーチ WJBL アシスタントコーチ
C	38	22 年	各世代別代表，日本代表，アテネ五輪出場 WNBA プレイヤー，中国リーグプレイヤー	起業，大学院進学 WJBL コーチ
D	32	20 年	インターハイ 3 位，U-19 世界選手権出場 ウィリアムジョーンズカップ日本代表	大学進学，大学アシスタントコーチ 結婚

ドキャリア選択に至るまでの径路を具体的に提示することを目的としている．そのため，キャリア選択時の思考過程や辿ってきた径路について語ってもらいつつ，現在のセカンドキャリアに繋がる経験の内容を焦点的に分析するために，径路の多様性や複線性を描くことができる複線径路等至性アプローチ（TEA）を分析の枠組みとして用いることとした．TEA はヴァルシナー（2013）によって述べられている文化心理学に依拠しており，そこでは人の違いを比較するのではなく，生を享けた個人がその環境の中で生命を維持し生活し人生を全うするプロセスを描く心理学的試みのことを指す（安田・サトウ，2012）．

TEA は，非可逆的な時間の流れで生きる人の行動や選択の径路を分析するモデルである TEM，研究対象のサンプリング構造として，先述の通り本研究で用いた HSI，変容プロセスを理解・記述するための理論である「発生の三層モデル（Three Layers Model of Genesis：以下「TLMG」と略す）」の 3 つの要素から構成される．その中心となる TEM では，何らかの選択とその後の状態の安定や変化を，複線性の文脈の上で描き，人の行動や選択において複数存在する径路のうち，ある定常状態に等しく辿り着く・収束するポイントを「等至点」と定めている．また径路が発生・分散していくポイントを「分岐点」，多くの人が必ず通るポイントを「必須通過点」などと概念化することで，人生径路の多様性や複線性を描くことができるという特徴が存在する．表 2 は TEM の主要概念を表したものである．

次に，発生の三層モデルとは，Valsiner（2007）によって提唱された行動選択あるいは転換点といった個人の変容に焦点を当てて記述するモデルである．分岐点において，等至点に近付けようとする「社会的ガイド」と等至点から遠ざけようとする「社会的方向づけ」の働きかけによって径路選択を判断していくことになる．その場面に着目し，価値観・信念，記号，行動の 3 つの観点から分析をするための概念である．本研究では，高校卒業時の進路選択および，WJBL を引退するという選択にあたって，その選択が何によって促進されたり遠ざけられたりしたのかに着目する際に発生の三層モデルを使用した．

3. データ収集と分析方法

本研究では，サトウ（2006）の提唱した TEM 研究の手続きを参考に，以下に示す TEA の基本的なプロセスに準じてデータを収集した．

（1）等至点の設定

高校卒業後の進路選択と引退後のセカンドキャリア選択に至るまでの多様な径路について，TEM を用いて明らかにするという研究の目的に従い，等至点を①「WJBL に入団する」，②「現役を引退する」と設定した．

（2）1 回目インタビューの実施

2021 年 2 月―4 月にかけて，Web 会議システム（Zoom）によるインタビューを実施した．本研究ではオンラインでインタビューを実施したため，研究対象者は普段から慣れ親しんだ自宅や職場からインタビューに応じた．そのため，語り手が安心できる場所を設定することができていたと考えられる．インタビューを始める前に，調査の趣旨

表 2 TEM の主要概念

主要概念	意味
等至点 (Equifinality Point)	・研究対象者の置かれている状況　・多様な経験の径路が一旦収束する地点
分岐点 (Bifurcation Point)	・ある経験において選択可能な複数の径路を選ぶ地点
社会的方向付け (Social Direction)	・等至点から遠ざけようとする環境要因およびその下支えとなる社会的圧力
社会的ガイド (Social Guidance)	・等至点に近づけようとする環境要因およびその下支えとなる社会的圧力
発生の三層モデル (Three Layers Model of Genesis)	・径路選択における行動変容を価値観・記号・行為の３層でとらえるモデル
必須通過点 (Obligatory Passage Point)	・多くの人が必ず経験せざるをえない地点
両極化した等至点 (Polarized Equifinality Point)	・等至点とは対局にある状況
非可逆的な時間 (Irreversible Time)	・単位化された具体的な時間の長さではなく、質的に持続している状態

やデータの活用範囲について説明し，プライバシー保護の方針や録画の可否について口頭によって同意を得た．また，研究協力は自由な意思に基づくものであり，同意後も研究発表までは随時撤回できること，その場合も一切の不利益を被ることはないことを説明した．なお，本研究の内容から個人が同定されても支障がないかどうかについても確認した．本研究は筑波大学体育系研究倫理委員会の承認を受けて実施された（課題番号：体020-87）．1 回目のインタビューにおいては，高校卒業時の進路選択から，WJBL 引退，現在の等至点に立つまでの経験について半構造化インタビューにて聞き取りを行った．質問内容は，①進路選択の経緯，②対照の立場（大学進学）だった場合のイメージ，③進路選択時に日本代表入りを見据えていたか，④進路選択について良かった点・後悔している点，⑤セカンドキャリア選択の経緯の 5 点を基幹とした．

（3）分析・TEM 図の作成

TEM 図の作成については，荒川ほか（2012）の手順を参考にした．まず，インタビューの録画記録を逐語化した．その後，対象者の語った内容について意味のまとまりごとに切片化し，それぞれに内容を端的に示すラベルをつけた．そして，それらラベルつきの切片を時間軸に沿って並べ，対象者それぞれの個別の TEM 図を作成した．

（4）2 回目インタビューの実施

2 回目のインタビューでは，(3) で作成した個別の TEM 図を対象者と共有しながら，進路選択やセカンドキャリア選択についてより深く探りたい部分について語りを得た．

（5）分析・TEM 図修正

（4）で得られた語りを（3）で作成した個別の TEM 図に反映させ，修正した．

（6）TEM 図の統合

この段階で，これまでの個別の TEM 図を 4 名分に統合した．個人が辿った径路を複数名分重ね合わせ，多様な径路や共通する経験をより鮮明に描くことで，本研究の目的を達成することができると考えた．

（7）3 回目インタビューによる TEM 的飽和

3 回目では個別の TEM および統合した TEM 図の内容について最終確認を行った．TEA の手法として 3 回のインタビューを実施するトランスビューが推奨されており（安田・サトウ，2012），この時点で対象者が各内容について十分納得したことをもって TEM 的飽和とした．

（8）分析・TEM 図の修正と総合考察

（7）で確認した内容を反映し，TEM 図の修正を行い，まとめを実施した．

Ⅲ　結　果

女子バスケットボール選手における高校卒業時の進路選択から WJBL 引退・セカンドキャリアに移行するまでの多様な径路について，分析の結果明らかになった詳細を以下に示す．

1.　高校卒業時の進路選択に関する径路の共通性と多様性

図 1 は，対象者 4 名が高校卒業時の進路選択から WJBL 引退・セカンドキャリアに移行するまでの多様な径路を，左から右へ流れる非可逆的時間を用いて TEM 図で表したものである．また，対象者個別の TEM 図を図 2―図 5 に示す．まず，育成年代とされる中学―高校生年代を経て，等至点①「WJBL に入団する」に至るまでの時期を「育成年代期」とした．等至点①に至る対象者 4 名は全員，中学から高校への進学においても，多数の高校からオファーを受けるような競技力を有した，各年代のトップレベルの選手であった．進路選択の分岐点において，対象者 A，B，D は大学進学も選択肢として考えており，対象者 C は大学進学をあまり考えていないというように径路が分岐していた．ただ，全員に共通する事項として，高校卒業時の進路選択においては家族と高校のコーチの影響が大きく，「社会的ガイド」，「社会的方向づけ」のどちらにも作用していたことが明らかとなった．

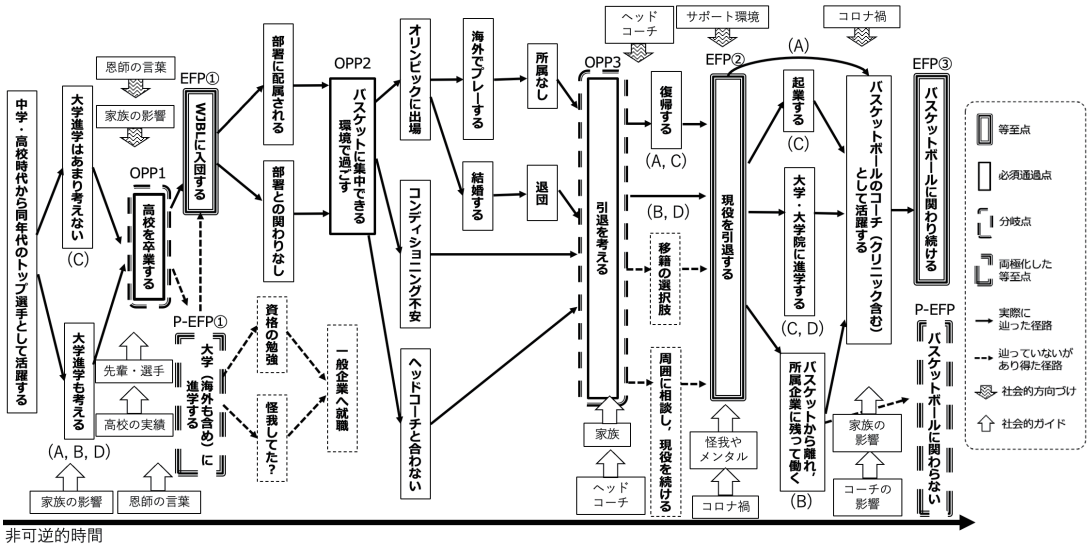

図 1　高校卒業後に WJBL に入団した選手の辿った TEM 図

2.　WJBL 入団後に経験した径路の共通性と多様性

「等至点②現役を引退する」に至るまでの時期を「現役期」とし，さらに引退・セカンドキャリアを意識し始めた時期を「キャリア移行期」と期分けした．

表 3 は高校卒業後すぐに WJBL 入団を選択して良かったことと後悔していることについての質問に対する，研究対象者 4 名の回答をまとめたものである．全ての対象者が，早期から積み上げたトップレベルの経験知やバスケットボールに集中できる環境を良かった点としてあげていたことから，「バスケットボールに集中できる環境で過ごす」という必須通過点（Obligatory Passage Point）が明らかとなった．また，後悔していることについては，大学生活や大学ならではという人間関係を築いてみたかったという思いはあるものの，大きな後悔を感じてはいないことも分かった．以上のことから，高校卒業後に WJBL に入団する選手は，高校卒業という早い段階において，トップレベルのバスケットボールを経験できたことが大きなメリットと考えられる．このことは，高校卒業後すぐに WJBL に進んだ選手の方が日本代表に多く存在するという先述した事実を裏付ける結果となった．

また，2 つ目のキャリアトランジションを迎えることとなるキャリア移行期において，等至点②「現役を引退する」に至るまでの選択には，高校卒業時の進路選択に比べ，影響を与える「社会的ガイド」や「社会的方向づけ」が多様化することが明らかとなった．

3.　現役引退後に経験した径路の共通性と多様性

今回の対象者 4 名について，引退後に辿った径路は，起業や進学，結婚，会社員生活など多種多様であった．全ての選手が同じ径路を辿るわけではないからこそ，このように TEM を用いて径路の多様性を示すことで，現役の選手における有用な資料になると思われる．また，対象者の径路は様々だが，セカンドキャリアとして全員がバスケットボールに関わり続けていることも分かった．そのため，分析に先立って改めて等至点①・②に加え，新たな等至点③として「バスケットボールに関わり続ける」を設定した．

Ⅳ　考　察

本研究では，女子バスケットボール元日本トッ

表 3　高校卒業後 WJBL に入団して良かったこと・後悔していること

	良かったこと	後悔していること
A	純粋なまま，良い意味で知識がないままその世界に飛び込んでしっかり新たにバスケットの土台っていうのを作れたところは本当に良かった．それに経済的にも自立できるところはすごく今振り返っても大きかった．若くからやっていたので本当にそこでしかできない経験キャリアっていうものを積むことができたのは，後々オリンピックだとか復帰に当たってもその経験値っていうのはかなり活かされた．高校卒業してからずっと実業団でやったからこその経験知でもあるかなと思いますね．	いやーないかな．若いうちは大学の飲み会とか同窓会とか，そういうのに行けない，友達の集まりに行けないっていうのはすごく寂しかったし，初めて私もその時家を出たので，慣れない環境で生活していくっていうので，もう休みの 1 日が本当に恋しいと言うか．その時の感情で後悔とはまた違うかなと思う．
B	バスケットに費やす時間が圧倒的に長いので，本当にバスケットだけに集中できた環境だったので，そこは一番よかったです．お給料もいただけるし，親への負担とかも．親にはちょっと楽させられたのかなとか考えますね，一番はそこですかね．	大学に行ってみたかったなっていう思いは，やっぱりあって．やっぱ憧れじゃないですけど，夜更かししたりだとかバイト生活とかもそうですけど．そういう経験もちょっとしてみたかったなって．それはその時にしかできない経験だと思うので．（中略）そういう経験を 4 年間でできるのは，セカンドキャリアに関して言えば，得るものは多いのかなって考えました．
C	高校卒業してその時のトップの企業に入社出来たっていうのは自分の中で，偉そうに言うわけじゃないけど誇りに思って過ごしてきたかなって思います．現実問題いろんな大変なこととかもあったけど，入って良かったなって思うのは，この自分の人生の中で，少しでも早く，そういう（トップ選手になれる）ような可能性がある場所に行けたってのは大きかったかな．	いいことばかりじゃなかったから，まぁそういう時には，逃げ場じゃないけど，やっぱアメリカ行っとけばよかったんじゃないかとか，もっと違う選択肢が自分にはあったんじゃないかっていう葛藤も，自分にはあったかな．
D	一番は多分人との出会いだと思う．その当時の人たちと一緒にバスケができたってことだと思う．あとはやっぱり，本当に自分が思ったようにバスケに打ち込める環境でやれて，良くも悪くも自分次第じゃないけど，そういうとこかな．	パイプの築き方は違っただろうなって思う．大学生活で学ぶことっていうのはたくさんあったんだろうなって思って．人間関係ももしかしたら当時，違った形で学べたかもしれないし．

プ選手の高校卒業後の進路選択と引退後のセカンドキャリア選択に至るまでの径路およびその背景について，TEA を用いて明らかにすることを目的とした．結果として，各時期（育成年代期・現役期・キャリア移行期）における径路の共通性と多様性を示すことができた．考察においても各時期に分けて記述するとともに，発言を引用する際は TEM 図に記載があるかどうかに関わらず，【　】で示すこととする．

1.　育成年代期の径路選択

育成年代期の径路選択については，大学進学を考えた対象者 A・B・D とあまり考えなかった対象者 C で径路の特徴が異なったため，それらを分けて考察する．

1.1　大学進学を考えた A，B，D について

まず，対象者 A（図 2）は進路選択における最初の段階では，【両親も姉も手に職と資格を持って働いていた人たちなので，私も何かしら資格を取るんだろうなっていうのと，大学生活を楽しんでみたいっていう憧れもあって，大学に行くと言っていた．】と語っており，また，【母もいきなり高卒で実業団に行くのはちょっと心配していて，何かしら資格だったり自分の強みになるものを持ってから勝負の世界に行くべきじゃないか】という語りからも，母や姉といった家族の考えは，等至点①から遠ざけようとする「社会的方向づけ」となったと考えられる．しかしその後，高校のコーチに大学進学の意思を伝えたところ，実業団に進むことを強く勧められたことで，WJBL への入

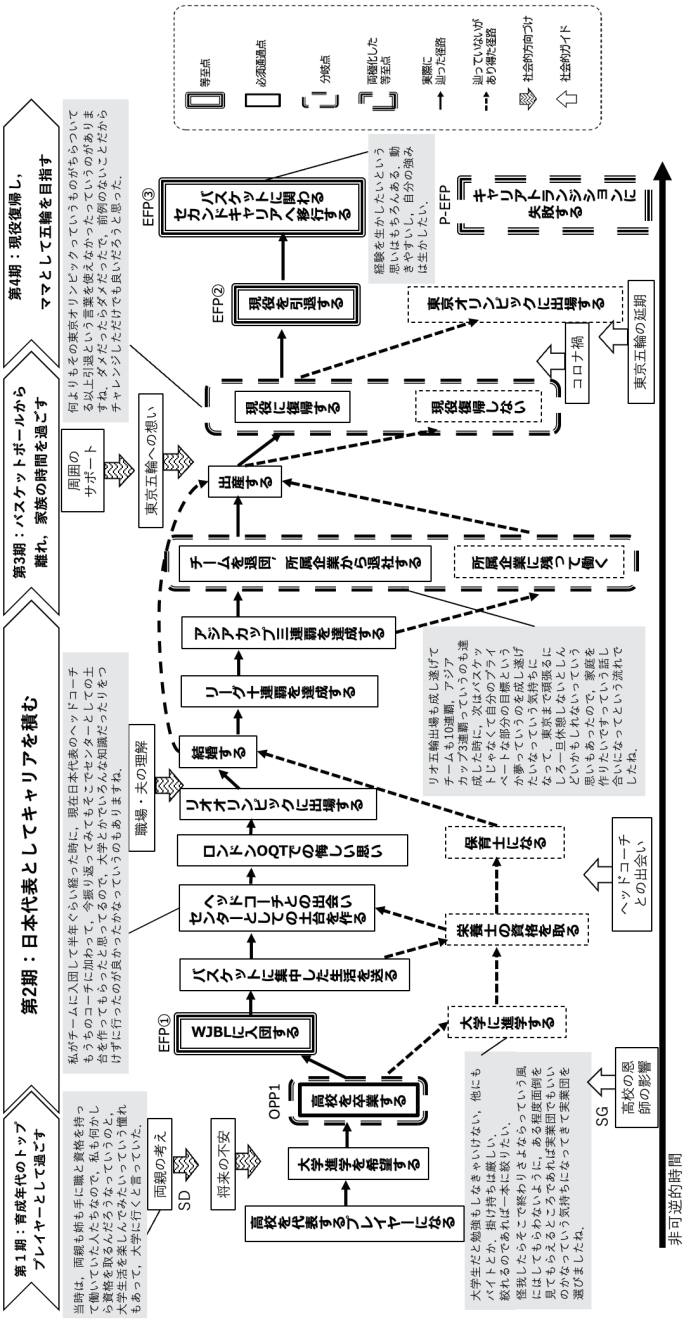

図 2　研究対象者 A の TEM 図

団をもう 1 度検討することとなった．ここでの高校のコーチの考えは，家族の考えとは異なり，等至点①に近づけようとする「社会的ガイド」となったと考えられる．

次に対象者 B（図 3）は進路選択における最初の段階では，将来的にバスケットボールの指導者になりたいと考えていたことから，【自分の中でその指導者やる＝学校の先生っていう，昔はほぼそうだったと思うんですけど，それがちょっと大きかったので，はじめ進路を聞かれた時に大学に行きたいと先生には言ったこともあって】と語っている．こうした本人の意思は，等至点①から遠

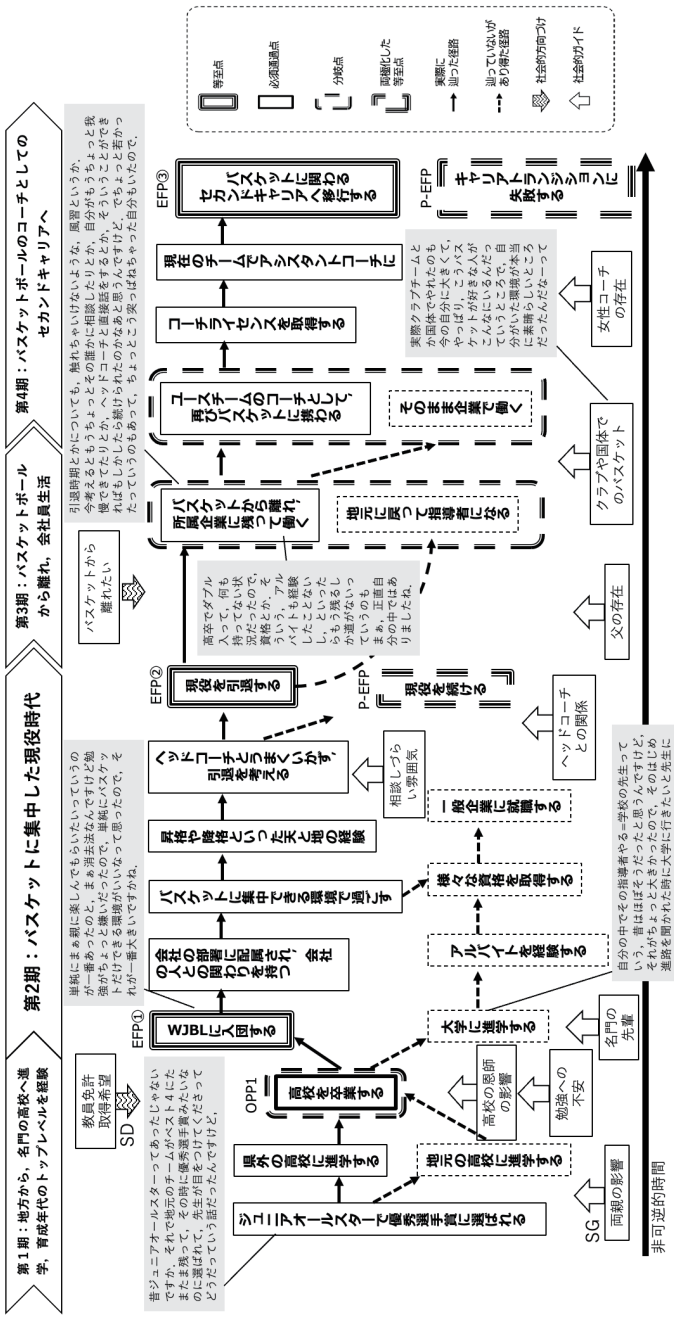

図 3　研究対象者 B の TEM 図

ざける「社会的方向づけ」となったと考えられる．高校のコーチに進路相談をした際には【じゃあ大学どこ行きたいんだ】というように「社会的方向づけ」を後押しする言葉かけがあったこともわかった．しかし，最終的には【高校の時に先輩たちを見てて，やっぱりトップで活躍してる先輩も多かったですし】という名門校だからこその先輩選手から受けた影響や，【消去法なんですけど勉強がちょっと嫌いだったので，単純にバスケットだけできる環境がいいなって思ったので，それが 1 番大きいですかね】といった勉強への不安などが等至点①に近づける「社会的ガイド」となり，

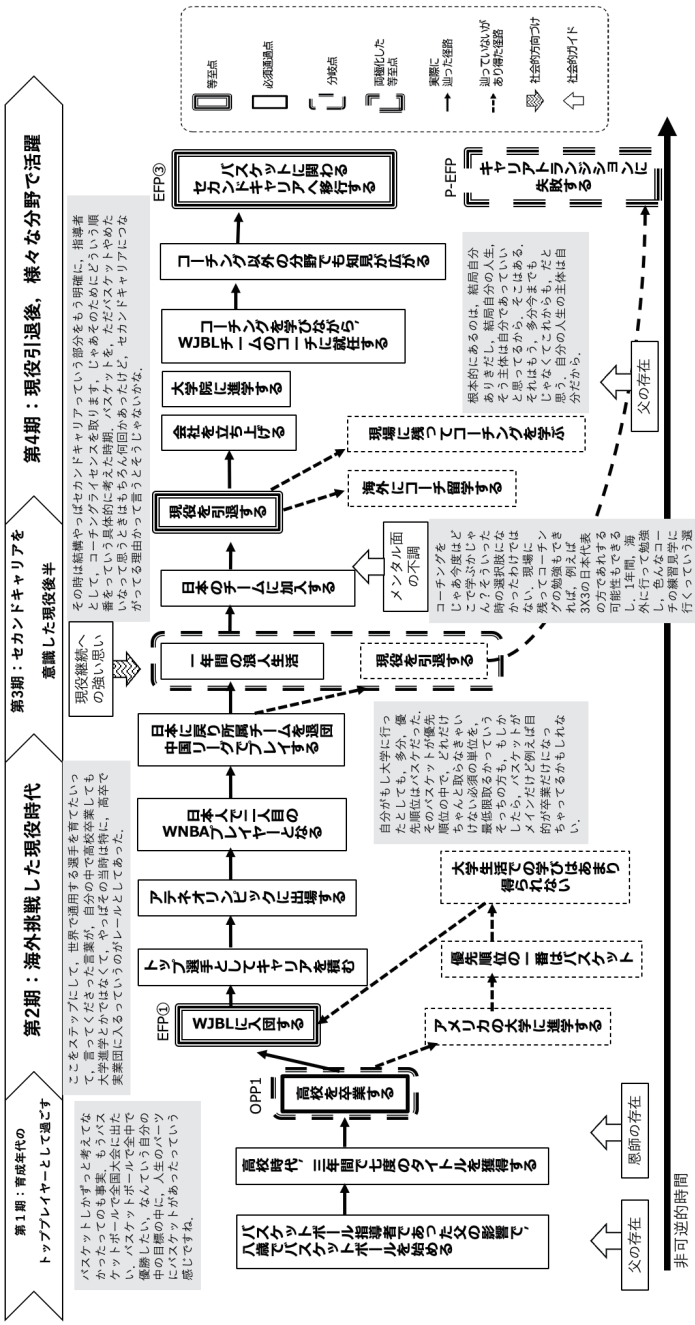

図4 研究対象者Cの TEM 図

【両親がいいよって言ってくれたのが1番ですかね】という語りからも分かるように，両親が考えを否定しない環境も後押しし，WJBL への入団に至ったと考えられる．

対象者D（図5）は，進路選択において【実はうちは親が大学に行って欲しい派だったので．高校3年生のギリギリまで，どうするかっていう感じでした】と語っているように，両親の考えは等至点①から遠ざける「社会的方向づけ」となっていたと考えられる．しかし，高校生の時に世代別の代表に選ばれ，世界レベルでの試合を経験したことや，高校のコーチが強く WJBL 入団を勧め

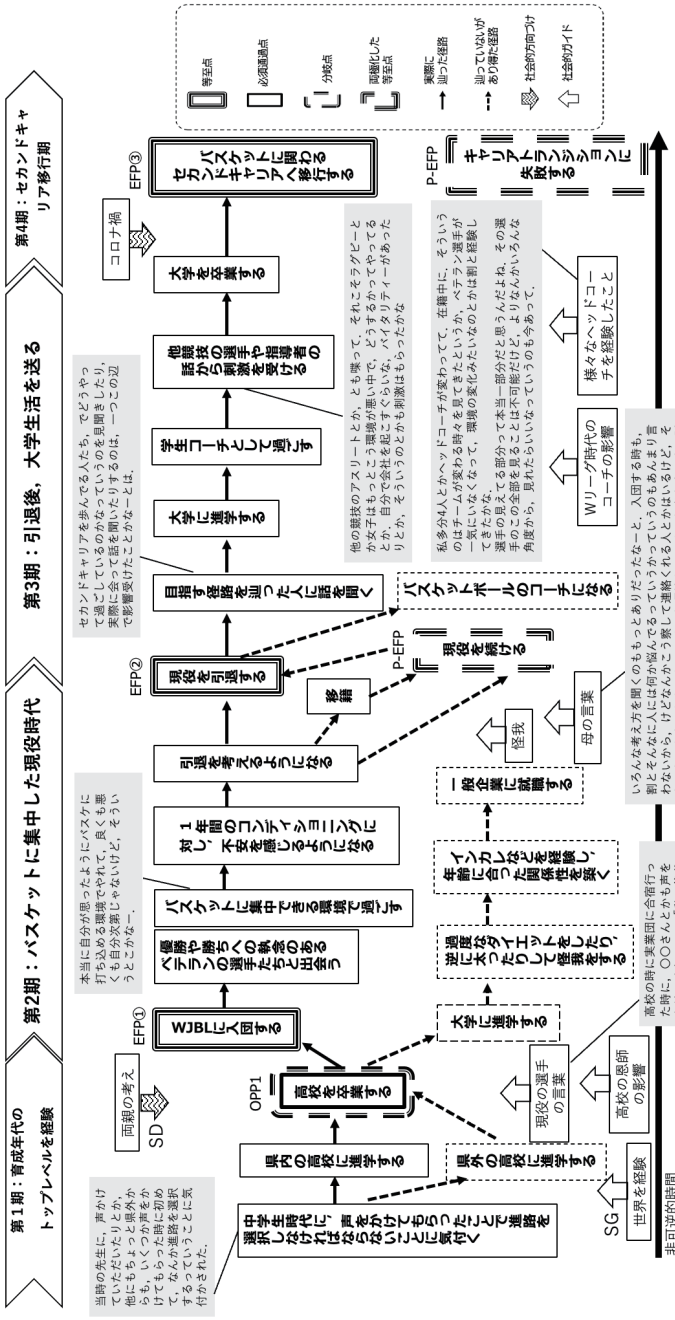

図 5　研究対象者 D の TEM 図

たこと，【高校の時に○○（実業団チーム名）とかに合宿行った時に，××さん（当時の現役選手）とかも声をかけてくれてて，「私の後釜いないんだよね」みたいな．（中略）なんか私ももういい歳なんだよね，とか言われて．当時やっぱり○○が強かったから，そこでもなんかいろいろ吸収できるかなって言うのはすごい（あって）．（中略）そういうふうに言ってもらえることもありがたかった】という実際に現役で活躍している選手から言葉をかけられたことなどが「社会的ガイド」となり，WJBL への入団に至ったと考えられる．

1.2 大学進学をあまり考えなかったCについて

対象者C（図4）は4名の中で唯一，大学に進む選択をあまり考えていなかった．等至点①に近づける「社会的ガイド」として，【父親が大学の先生でバスケットボールの指導者だったっていうこともあって，バスケットボールに馴染んでいました．なので，言い方を変えればバスケットしかずっと考えてなかったってのも事実】と父親の影響があったことを語っている．また，高校のコーチについても，【ここをステップにして，世界で通用する選手を育てたいって言ってくださった（その）言葉が，多分，自分の中で高校卒業しても大学進学とかではなくて，その当時は特に，もう十何年前なので，どっちかと言ったら高卒で実業団に入るっていうのがレールとしてあった】と語り，同じく等至点①に向かう「社会的ガイド」となっていたことが明らかとなった．

1.3 高校卒業時の進路選択に関する「発生の三層モデル」

図6は，等至点①に向かうまでの対象者の辿った径路を発生の三層モデルにまとめたものである．将来のビジョンがはっきりとない育成年代の選手たちにとっては，「社会的方向づけ」にも「社会的ガイド」にもなり得る家族やコーチの存在によって進路選択における葛藤を抱えていたことが読み取れる．本研究では，4名中3名がキャリア選択時に大学進学とWJBL入団を迷う状況にあった．最終的には『行動レベル』における「自己決定」へと径路を辿るが，WJBL入団を選択する意味づけとして『価値・信念レベル』に表出する事項としては「バスケットボールに集中できる環境を求めること」，「絞れるのであればバスケットボール一本に絞りたい」という価値観であった．

ここでは唯一，対象者Cは『価値・信念レベル』が一貫しており，他の選手よりも明確な意思を持っていた．それは以下の語りから明らかである．【バスケットボールで全国大会に出たい．バスケットボールで全中（全国中学校バスケットボール大会）で優勝したい，なんていう，自分の目標の中に，人生のパーツにバスケットがあったっていう感じですね．で，そんな所から，今じゃもうバスケやってる人は誰もが知ってる○○高校に進路を決めて．その時からはもう絶対に全国制覇だっていう自分では目標は掲げたけど，先生はどちらかと言うと，ここをステップにして，世界で通用する選手を育てたいって言ってくださった言葉が，自分の中で，もう高校卒業しても大学進学とかではなくて】．上向・飯田（2009）は男子サッカー選手を対象とした研究において，「大学

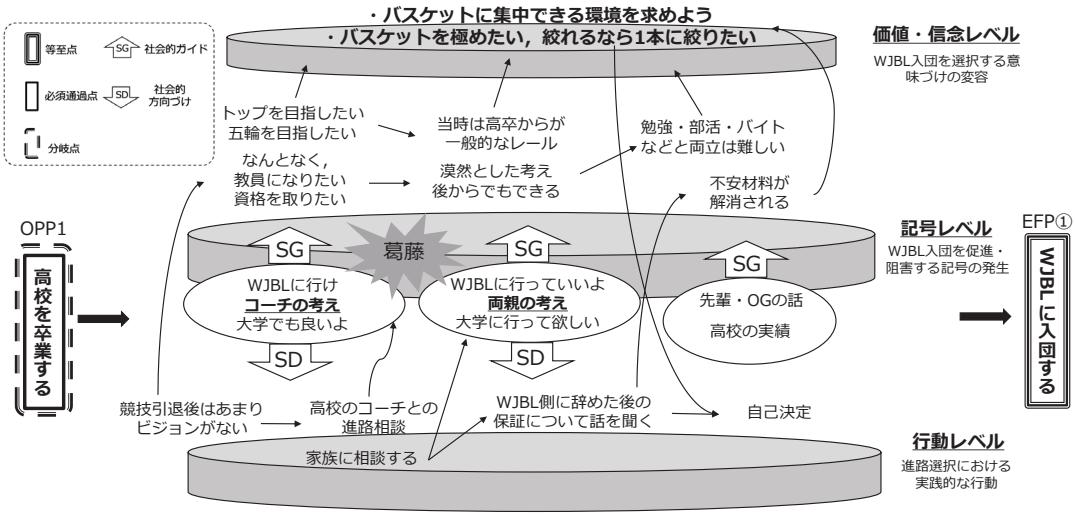

図6 高校卒業後の進路選択の径路に関する発生の三層モデル

進学を明確に志向しない選手は，他の選手よりもプロサッカー選手になるという具体的な展開をもち，その決定の程度も高い」と報告している．競技や性別こそ異なるものの，これを裏付ける結果となった対象者 C は，「社会の中で自分の役割を果たしながら，自分らしい生き方を実現していく過程」（中央教育審議会，2011）と定義される「キャリア発達」の段階が，他の選手より一歩進んでいたのではないだろうか．

しかし，対象者 C のように自らの意思を明確に持って径路選択できる選手ばかりではなく，高校卒業時の段階では自らライフプランを考えた進路選択が難しい選手も多いことが考えられるため，高校の教員のみならず，「社会的方向づけ」にも「社会的ガイド」にもなり得る家族やコーチの協力体制を整える必要があると考えられる．さらに，それは決して選手の径路が家族やコーチによって強制されるものではなく，選手自身が先を見据えて自らの径路を選択できるような環境を整えるということである．対象者 A や D のように，進路選択に迷った段階で WJBL チームのフロントスタッフや選手に話を聞く機会が「社会的ガイド」となった場合も見受けられた．高校生期のキャリア発達課題の 1 つとして「進路の現実の吟味と試行的参加」が挙げられているが（中央教育審議会，2011），例えば，高校から WJBL 入団を選んだ選手，高校から大学進学を経て WJBL 入団を選んだ選手それぞれに，高校生からインタビューできるような環境や，複数チームにインターンシップのような形式で，練習やチーム活動に参加させてもらうような，体験的な学習の機会を設けるキャリア教育を取り入れることが必要なのではないかと考えられる．

2. キャリア移行期の径路選択

ここでは，引退を考え始めてから復帰した対象者 A・C と引退を考え始めてからそのまま引退した対象者 B・D に分けて考察する．

2.1 引退を考え始めたものの復帰した A，C について

まず，対象者 A は現役選手を続けながら結婚し，その後出産を前に 1 度所属していた企業およびそのチームから退団している．その時点で「引退」という言葉を使うかどうか迷ったものの，それを踏みとどまらせた要因として自国開催のオリンピックを挙げ，【何よりもその東京オリンピックっていうものがちらついてる以上，引退という言葉を使えなかったっていうのがありますね．ダメだったらダメだったで，前例のないことだからチャレンジしただけでも良いだろうと思った】と語っている．目標とするオリンピックへの想いが，等至点②「現役を引退する」から遠ざける社会的方向づけとして働いたことが読み取れる．その後も復帰にあたっては，日本代表のヘッドコーチが，10 年来同じチームで活動してきたコーチであり，気心が知れている状況かつ相談しやすい環境であったこと，子どもがいる状況でも海外遠征や国内合宿にも参加できるよう，周囲のスタッフがサポート環境を整えていることも等至点②から遠ざける「社会的方向づけ」となっていたことがわかった．しかし，その後新型コロナウイルス感染症の影響を受け，合宿等が全て中止となってしまい，目標としていた東京オリンピックも 1 年の延期が決定したことを受け，引退を決意している．【1 年間体力と気力，精神が続かないと思った．もちろん，WJBL のチームもいくつか声をかけてくれて，子どもがいる状況でもスケジュールは自分で決めて良いとか，サポートするというチームもあった．ありがたいことだったが，気持ちが続くかわからないこと，そういう状態の選手がいるということはチームに迷惑をかける，それは嫌だなという思いだった．復帰してから引退に向かうまでは，合宿中止，オリンピック延期と徐々に徐々に引退に気持ちが向いていったという感じ．だが，そこにずっとコロナが付き纏っている感じ】と語られたように，新型コロナウイルス感染症拡大が大きな「社会的ガイド」となって引退に向かって行ったと考えられる．

次に，対象者 C は海外のリーグに在籍中，登

録の関係でどこのチームにも所属できないと空白の1年を経験している.【現役を引退するかしないかもね,(その時)もちろんよぎった.】と語られたように,その時点で現役引退し,コーチの道に進むという径路選択もあったものの,実際には【20年以上ずっとやってきたバスケットボールに,登録上の問題で所属できなくてプレイできなかったので引退しますっていうのは.もうちょっと選手としてやりたいなっていう気持ちが上回った.】と語られたように現役への強い想いが「社会的方向づけ」となったことが分かった.その後,WJBLのチームに所属し現役生活を終えることとなるが,等至点②へは,メンタル面の維持が難しくなったことと,【次のセカンドキャリアに1つステップを踏もうって思ったのが上にちょっとなった】と語るように,次に進む覚悟ができたことが「社会的ガイド」となった.

2.2 引退を考え始めてそのまま引退したB,Dについて

対象者BはWJBL入団後に関わったコーチの中で,1人のヘッドコーチとうまくいかなかったことが引退へと近づける「社会的ガイド」となっていた.実際に決断するまで2年ほどは「バスケットを続けたい」という「社会的方向づけ」との間で葛藤していたものの,最終的にはバスケットボールが嫌いになってしまいそうな状況まで追い込まれたことで引退を決断している.加えて,【引退時期とかについても,触れちゃいけないような,風習というか…今考えるともうちょっとその誰かに相談したりとか,自分がもうちょっと我慢できてたりとか,それこそヘッドコーチと直接話をするとか,そういうことができればもしかしたら続けられたのかなあと思うんですけど】と語ったように,周りに相談し辛い環境も「社会的ガイド」として働いたことも分かった.

対象者Dはまず,等至点①に至るまでに家族の影響が「社会的方向づけ」としてはたらいていた.それは,WJBL入団という径路を選択したものの,【母親からは3年ぐらいやって芽が出なかったらもう大学に切り替えなさいよって言われるぐらいだったから】と語ったことからも窺える.結果として,3年以上WJBLでの競技歴を積むことになるが,引退を考えるようになった社会的ガイドとして母親から【次に進んだら?】と声を掛けられたことを挙げている.その他にも,怪我や年齢的な節目も社会的方向づけとなったことが語りから明らかとなったが,【いろんな考え方を聞くのももっとありだったなと.(…中略)いろんな環境とかいろんな考え方の人に話を聞いてから決断してもよかったのかもしれないなって】と語られたように,自分の意志で決断したものの,他者に相談しなかったことに対し,後悔を抱いていることも分かった.

2.3 引退を考え始めた後の発生の「三層モデル」

図7は等至点②に向かうまでの対象者の辿った径路を発生の三層モデルにまとめたものである.この分析からも分かるように,等至点②に至るまでにも多様な径路があり,そこに影響を与える「社会的方向づけ」や「社会的ガイド」も等至点①に至るまでよりも多様化することが明らかとなった.

そして,多様化する「社会的方向づけ」,「社会的ガイド」の影響によって到達する『価値・信念レベル』にも,前向きなものとそうではないものに分けられることも明らかとなった.対象者Cの場合,引退を決断するまでの「社会的ガイド」が生じた後,「次に進む覚悟ができた・自分で引退を決める」といった前向きな『価値・信念レベル』に達している.さらに,対象者Cは現役時代に【セカンドキャリアという部分を,明確に指導者として(意識して),コーチングライセンスを取ります,じゃあそのためにどういう順番を(辿れば良いか)っていう具体的に考えた】と述べており,現役選手時代から引退後のことを考えていた時期があることも分かった.しかし,対象者Bの場合は,「社会的ガイド」の影響によって「早く解放されたい」という『価値・信念レベル』に達しており,その後数年間バスケットボールから離れるという逃避行動を選択している.【辞めても会社に残れるっていう保証があったので,特

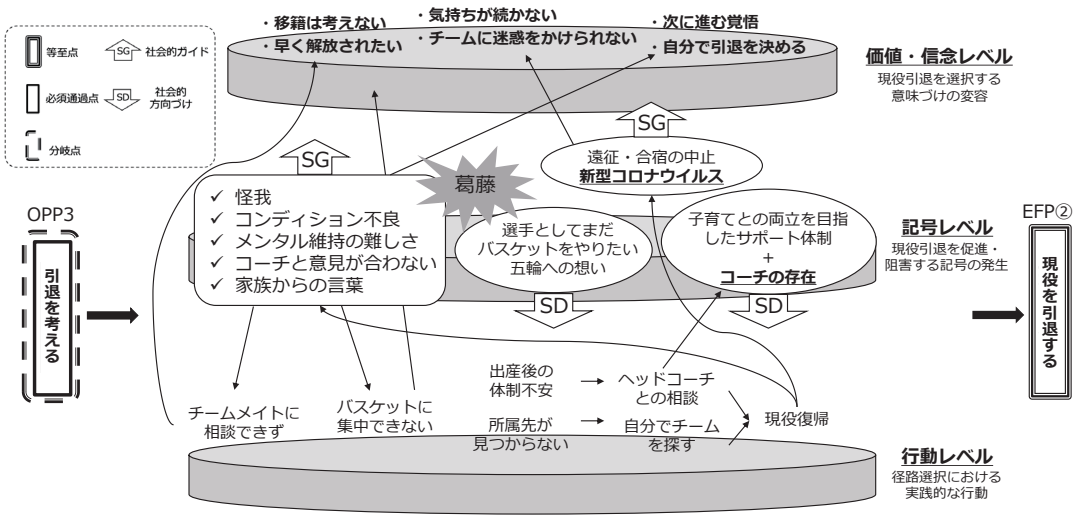

図 7　現役を引退するに至る径路に関する発生の三層モデル

にこれをしなきゃいけないあれをしなきゃいけないっていうところまでは，考えずに済んだというか逆に．最悪（でも）会社に残ればいいやっていう…】という語りからは，現役選手時代に引退後のことはあまり考えていないことが読み取れる．Elodie and Sagas（2020）が「競技を終えた後のライフキャリアプランニングがキャリアトランジションの課題を緩和する中心的役割」と報告していることからも，やはり現役選手時代から，競技引退後のライフプランを見据えておくことが必要なのではないかと考えられる．

そこで問題となるのは，1 番長く時間を共有するチームメイトについては語られなかったということである．分析以前にはチームメイトが「社会的方向づけ」や「社会的ガイド」になると予想していた．しかし，対象者 B および D の分析結果からも分かるように，現役中には引退やその後のキャリアについてチームメイトに相談し辛い環境があることが示唆された．これは小畑（2014）の先行研究を裏付ける結果となったが，現役選手時代から，競技引退後のライフプランを見据えておくためには，同じ課題を抱える選手同士で相談し合える環境にしておくべきであると考える．オーストラリアにおけるキャリア発達の研究では，アスリートに対し，個人または小グループでのカウンセリングを使用したプログラムが最も効果的であり，そのようなプログラムは，現役選手時代および引退後の両方で提供された場合に最も役立ったことが報告されている（Natalia and Tatiana (eds.), 2013）．例えば毎年のシーズン終了後には引退後のキャリアについて考えるためのカウンセリングの時間が設けられたとすれば，そこで描いた引退後のキャリアに向けて，現役選手時代から動き始められることもあると考えられる．それが，何人かの小グループでのカウンセリングであれば，他の選手がどのように引退後のキャリアを描いているかを知ることもでき，選手のキャリア発達のきっかけになるのではないだろうか．

先述の通り WJBL では現役時代に起業する選手など，デュアルキャリアを選択する選手も現れ始めている．WJBL やチームでの環境作りに期待するばかりでなく，選手自身からキャリアについてのアクションを起こしたり，支援を求める発信を増やしたりしていくべきであると考えられる．

3.　現役引退後の径路選択

現役引退後，セカンドキャリアにおけるバスケットボールとの関わり方は，クリニック活動や WJBL の解説，大学チームのコーチ，WJBL のコーチなど様々であるものの，3 名の対象者が等

至点③に近づける「社会的ガイド」としてWJBL時代に関わったヘッドコーチの存在を挙げていた．これまでの結果でも，高校卒業時の進路選択から，現役引退に至る径路選択と人生の節目となるようなキャリアトランジションにおいてはその時々のコーチの存在が大きいことも分かっている．これは，日本スポーツ振興センター（2014）が実施したデュアルキャリアに関する調査において，コーチがアスリートのキャリア形成に与える影響が大きいという報告を裏付ける結果であった．国際コーチングエクセレンス評議会（2012）においても，「コーチは，選手のアスリートキャリアを支援，推進，高めるだけでなく，しっかりした価値観や優れた振る舞いや常識を持つ『善の人間』を育てる責任がある」と述べられている．WJBLのコーチは，選手と関わる時間が3年や4年と限られている学生時代のコーチより，長く選手に影響を与える可能性もある．競技だけでなく，選手のセカンドキャリアに与える影響の大きさを理解し，現役の選手と関わっていく必要があると考えられる．しかし，先述の日本スポーツ振興センター（2014）の調査では，諸外国調査をとおして，コーチを対象にした意識啓発や教育に関するプログラムの有無，および具体的プログラムに関しては明らかにされなかったことも報告している．選手やコーチのセカンドキャリアを支援する事業はマイナビアスリートキャリア（online）を始め，国内でも見受けられるようになってきている．次の段階として，日本の女子バスケットボール競技が先駆けて，コーチライセンスを所有するコーチに対し，選手のキャリア発達を支援するための研修会等を開催していくことも重要であると考えられる．

また，バスケットボールとの関わり方が多岐にわたることに関しては，高校卒業時の径路選択と同様に，「試行的参加」を積極的に促すべきであると考える．選手を引退したからといって，すぐにバスケットボールの解説ができる，コーチができるというわけではない．現役選手時代から，例えば，オフシーズンにはインターハイの試合で解説を学ぶなど，WJBL選手の「インターンシップ」制度を設けることも必要であると考えられる．

V まとめ

本研究は，女子バスケットボール元日本トップ選手の高校卒業後の進路選択と引退後のセカンドキャリア選択に至るまでの径路およびその背景について，TEAを用いて明らかにすることを目的とした．対象者4名へのインタビューを通して，個別のTEM図や発生の三層モデルからキャリア選択過程の多様性を提示できた一方で，径路の類型把握には至らなかった．この点は研究の限界であり，今後の課題といえる．また，選手のキャリア発達を促すインターンシップやカウンセリングの制度をこれから整えていくためには，現役選手がキャリアに関して直面している課題や考え方の実態把握が必要であろう．このような課題は残されるものの，これまで未知であった元WJBL選手のキャリア発達過程およびその背景についてTEM図を用いて個別具体的に提示できたことは，本研究の主たる独創性といえる．実際に様々な径路選択を経験してきた選手たちの生きた事例を詳細に示すこと自体が，選手の進路選択やセカンドキャリア選択の幅を広げ，キャリア発達に繋がると考えられる．競技団体，競技種目，競技レベル等によって選手を取り巻く環境は必ずしも同一でないことから，選手の進路選択へ向けた具体的な策を検討する際には，特定の競技種目を対象とすることが推奨されている（清水ほか，2010）．本研究のような個別具体的な事例提示を他の種目でも積み重ねていくことで，アスリートのキャリア発達を促すスポーツ界としての方向性が見えてくることを期待したい．

注

注1）「特別指定選手」は，Bリーグにおける選手契約および登録に関する規定の第2章第1節第38条にて「全日本大学バスケットボール連盟および全国高等学校体育連盟バスケットボール部所属選手ならびに，満22歳以下の選手を対象に，個人の能力に応じた環境を提供することを目的に特別指定選手として認定す

る」と定められている．この制度によって，高校や大学のシーズンオフ期間に，国内トップレベルのバスケットボールを経験できるだけでなく，プロ選手としての実生活を味わうことができるため，学年を問わず特別指定契約を結ぶ選手が増えてきている．

注 2)「キャリアトランジション」とは，キャリアの移行を指す言葉として汎用されている．本研究においては，高校卒業から WJBL 入団，WJBL 引退からセカンドキャリアへという 2 つのキャリアトランジションに着目した．

文　献

荒川歩・安田裕子・サトウタツヤ（2012）複線径路・等至性モデルの TEM 図の描き方の一例．立命館人間科学研究，25：95-107.

朝日新聞デジタル（2021）【五輪動画】出産，現役復帰，2 度目の引退：元バスケ代表選手の思い．https://www.asahi.com/articles/ASP7T61XTP7RUTQP02Y.html,（参照日 2021 年 3 月 11 日）.

中央教育審議会（2011）キャリア教育とは何か．p.16-19．https://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/detail/__icsFiles/afieldfile/2011/06/16/1306818_04.pdf,（参照日 2022 年 6 月 9 日）.

林晋子・土屋裕睦（2012）オリンピアンが語る体験と望まれる心理的サポートの検討―出来事に伴う心理的変化と社会が与える影響に着目して―．スポーツ心理学研究，39：1-14.

小林柊次郎・渡邊將司・森丘保典・岩瀧一生（2017）陸上競技日本代表選手の競技ヒストリー研究―男子短距離選手を対象にした複線径路・等至性モデル―．陸上競技研究紀要，13：90-108.

国際コーチングエクセレンス評議会（2012）Codes of Conduct for Coaches. https://www.icce.ws/_assets/files/projects/Codes_of_Conduct_2012_study.pdf,（参照日 2022 年 6 月 6 日）.

古殿幸雄・畑岸邦枝（2018）デュアルキャリア教育のための WJBL 引退者調査．日本知能情報ファジィ学会ファジィシステムシンポジウム講演論文集．34：150-155.

マイナビアスリートキャリア（online）https://athlete-career.mynavi.jp,（参照日 2022 年 3 月 18 日）.

三倉茜・小笠原悦子（2021）女性バスケットボール選手におけるコーチ興味を高める学習経験：トップレベルの女性アスリートを対象として．体育学研究，66：293-309.

向晃佑（2016）複線径路・等至性モデル（TEM）による送球イップス経験者の心理プロセスの検討．質的心理学研究，15：159-170.

Natalia B. S. and Tatiana V. R. (eds.) (2013) Athletes' Careers Across Cultures. Routledge.

日本スポーツ振興センター（2014）デュアルキャリアに関する調査研究報告書．p.20．https://sportcareer.jp/wp-content/uploads/2021/01/dualcareer_report_jsc_2013.pdf,（参照日 2022 年 6 月 6 日）.

日刊スポーツ（2020）バスケ高田真希が異色の社長に，収束の先に描く希望．https://www.nikkansports.com/sports/news/202004210000398.html,（参照日 2022 年 3 月 11 日）.

小畑亜章子（2014）女子バスケットボール選手におけるトップリーグ引退後の競技との関わりを規定する要因．筑波大学大学院修士論文.

笹川スポーツ財団（2014）オリンピアンのキャリアに関する実態調査．p.31．https://www.ssf.or.jp/Portals/0/resources/research/report/pdf/2014_report_27.pdf,（参照日 2022 年 6 月 10 日）.

サトウタツヤ（2006）発達の多様性を記述する新しい心理学方法論としての複線径路等至性モデル．立命館人間科学研究，12：65-75.

清水聖志人・高橋義雄・河野一郎（2010）大学運動部の指導・運営内容差異による就職状況の比較―レスリング競技者を対象として―．スポーツ産業学研究，20：119-129.

上向貫志・飯田義明（2009）J リーグユース選手におけるキャリアの志向性に関する研究―職業的アイデンティティからの検討―．武蔵大学人文学会雑誌，40：83-92.

Valsiner, J. (2007) Culture in Minds and Societies: Foundations of Cultural Psychology. Sage Publications.

ヴァルシナー：サトウタツヤ訳（2013）新しい文化心理学の構築．新曜社.

Wendling, E. and Sagas, M. (2020) An application of the social cognitive career theory model of career self-management to college athlete's career planning for life after sport. Frontiers in Psychology., 11(9): 1-14.

WNBA (online) Frequently Asked Questions: WNBA. https://www.wnba.com/faq/, (accessed 2022-03-11).

安田裕子（2015）コミュニティ心理学における TEM/TEA 研究の可能性．コミュニティ心理学研究，19：62-76.

安田裕子・サトウタツヤ（2012）TEM でわかる人生の径路－質的研究の新展開．誠信書房.

（2021 年 12 月 2 日受付
2022 年 7 月 20 日受理）

Advance Publication by J-STAGE
Published online 2022/7/28